川の子ども新聞

2003 冬号

上毛新聞

ぼくは利根川の水の精「ポトム」。利根川の源流でポトンと落ちた1滴の水から生まれたんだ。ぼくといっしょに、川と水のことを学んでみよう。

●もくじ

P1　川にまつわる話
P2-3　水のみち探検
P4-5　「めぐる水」のすごろく
P6-7　川ってなあに？その
P8　ポトムの楽校

藤原ダム(利根郡水上町)

川にまつわる話 5

板橋　春夫

◆藤原の八百比丘尼伝説

利根郡水上町藤原に、昔ヒノキヨドと呼ばれた深い淵があり、カッパが住んでいました。あるとき、ヒノキヨドで釣りをしていた老人がカッパと相撲を取っていると、カッパの頭の皿から水がこぼれ、ぐったりとなってしまったので老人は皿に水を入れてやりました。

カッパは助けてもらったお礼に老人を竜宮へ案内しました。そこで老人はおいしい肉を食べました。

それは人魚の肉でした。珍しかったので着物のたもとに入れて持ち帰りました。ところが偶然、孫娘がその肉を食べてしまったのです。

そのために孫娘は何百年も年をとらない八百比丘尼となり、諸国を歩き、そして村へ帰りましたが誰も知る人がいませんでした。八百比丘尼はそれを悲しみ利根川に身を投げたのです。その場所に尼が淵や尼がはね石と呼ぶ大きな石がありましたが、現在はダムの底になっています。

◆川浸り行事のいわれ

十二月一日は水神様を祭る日で、カワビタリ(川浸り)、カワナガレ(川流れ)などと呼ばれていました。昔はこの日、餅をついて川へ流す習わしがありました。

邑楽郡板倉町では、この日は娘を大蛇に差し上げる日で、あるときお金持ちの娘が大蛇に差し上げる順番になってしまいました。娘を橋のたもとへ置いて両親は泣く泣く帰ったのですが、その娘は橋の上から餅をちぎって投げたので大蛇はその餅を次々に食べてお腹いっぱいになり、娘を飲み込めなくなりました。そのために娘は助かり、それを記念してこの日は餅を川へ流すと伝えています。

◆川原湯温泉の湯かけ祭り

吾妻郡長野原町の川原湯温泉では、一月二十日に湯かけ祭りが行われます。凍えるような寒さの中、一番太鼓の合図で裸の若者がバケツを手に共同浴場の王湯に集まります。二番太鼓の合図で共同浴場前に祭られた湯前様の神前で紅白代表による汲み上げの神事が行われます。

次いで太鼓の響きに景気づけられ「お祝いだ、お祝いだ」と叫びながらお湯をかけ合うのです。あたり一面に湯煙が上がり、最後にくす玉が割られて鶏が飛び出て終わりになります。

この湯かけ祭りは、その昔、源頼朝が止まって困り、占ってもらうと卵の匂いのする湯なので鶏をいけにえにしなさいと言われたので、その通りにしたところ、湯がわき出ました。人々は喜びのあまり湯をかけ合って祝いました。その故事にちなんで行われると伝えています。

[参考文献]・林義明、奥利根おれのむら(水煙社、一九八四年)、郡丸十九・編著、上野の伝説(第一法規出版・一九七四年)、群馬県史資料編27民俗3(群馬県、一九八〇年)

板橋春夫(いたばし・はるお)
一九五四年生まれ。群馬歴史民俗研究会代表。近著に、暮らしの中の民俗(茅葺・巻二共著)、市川弘文館、二〇〇三年。論文に、民俗研究に於ける伝承と創造貞西(ぐんま文化財研究)二一号、二〇〇三年)などがある。